

五箇山の塩硝づくり

五箇山地域での主要な伝統的産業のうちの一つが、火薬に欠かせない原料である塩硝（硝酸カリウム）または硝石の生産です。塩硝の生産は、加賀藩が五箇山を治めていた300年間以上にわたって行われ、1543年の鉄砲伝来以後、飛躍的に成長しました。毎年大量に塩硝を買い上げていた加賀藩の守備を強固なものにするため、この地域での塩硝の生産は将軍（日本を統治していた軍の指導者）にさえも秘密にされていました。五箇山は大半が未開の地であり、たどり着くのが難しい地域だったため、秘密裏に硝石を生産するのに理想的な場所でした。

塩硝は、五箇山地域の合掌造りの家に一般的に備わっている囲炉裏の下に掘られた、最長2mの深さの穴の中で作られました。藁、土、ヨモギ、蚕糞などの原料を混ぜてその穴に入れ、約5年間発酵させます。囲炉裏を使用して発酵中の原料を温かく保ち、穴の中の原料を空気に触れさせ、追加の材料を加えるために年に一度混ぜ返しが行われました。時を経るうちに、細菌による硝化作用を通して土壤中に硝酸カルシウムが生成されます。土壌から硝酸カリウムを抽出するには、水と土壌を混ぜ合わせ、硝酸カルシウムが溶け出したその水を煮詰めて濃縮させます。その濃縮液に草木の灰を加え、不純物を取り除きます。灰に含まれる炭酸カリウムが濃縮液の中の硝酸カルシウムと反応して、硝酸カリウムと炭酸カルシウムが生成されます。炭酸カルシウムは不溶性のため、水の中で沈殿します。その後上澄み液を濾過し、さらに煮詰めて濃縮させ、冷やすと粗い塩硝の結晶が得られます。集めた塩硝の結晶は加賀藩に売り渡され、金沢にある加賀藩の倉庫へと運ばれました。江戸時代（1603-1867）の終わりに藩が廃止されたことにより、加賀藩による塩硝の買い上げは行われなくなりました。明治時代（1868-1912）の間には、チリから安価な硝石が輸入されたことにより、地元での生産量は減っていきました。

現在では、塩硝の館としても知られる菅沼村の塩硝資料館が五箇山への旅行客を迎えています。この資料館は、塩硝生産で使われた原料や道具を展示するために改修された合掌造り（急勾配の藁ぶき屋根の家）の建物内にあります。訪問客は、元々ポルトガルから伝来した鉄砲と火薬の日本での生産の歴史についてもより詳しく学ぶことができます。